

まちづくり 実践レポート

～北から南から～

美しい砂浜を美術館と捉えて
そこにあるすべてのものを作品に見立て
Tシャツアート展の開催等を通じて
地域の新たな価値を発信



高知県黒潮町
砂浜美術館



Tシャツアート展

私たちの町には美術館がありません。
美しい砂浜が美術館です。

——高知県黒潮町にある「砂浜美術館」のコンセプトだ。この言葉どおり、施設としての美術館が存在するわけではない。あるのは、4キロメートルにわたって遮るものもなく続く白い砂浜と、その背後に連なる松林。そして、ここを舞台とする自然や人間のあらゆる営みを、私たちに大切なメッセージを送り届ける「作品」と捉える。

そう考えると、24時間365日年中無休、季節や天候によって“展示内容”が刻一刻

と移り変わる砂浜美術館は、世界で最も先端をゆくミュージアムかも知れない。館長はニタリクジラ、BGMは波の音、夜の照明は月の明かり。砂浜の風景が常設展とすれば、人気イベントとしてすっかり定着した、5月の「Tシャツアート展」や11月の「潮風のキルト展」は、さながら毎年恒例の特別企画展だ。

このユニークな取り組みが始まったのは、今から30年近く前の1989年。住民・行政・アーティストの連携から、ボトムアップの形でうねりが起こった。



Tシャツアート展



シーサイドはだしマラソン全国大会

29回目のTシャツアート展に 3万人以上の来場者

五月晴れの真っ青な空と海に、1000枚以上のTシャツがくっきりと美しく映える。潮風を受けて一斉にひらひらとはためくその姿は、まさにアートそのものだ。29回目を迎えたTシャツアート展は、2017年5月3日から8日までの6日間、黒潮町入野の浜で開催され、来場者数は初めて3万人を超えた。

訪れた人々は、“Tシャツの波”の間を遊泳するように三々五々散策したり、お気に入りの作品と一緒に写真を撮ったり。自分が応募した作品を見つけて歓声を上げる人も、そこそこに見られる。砂の感触を噛みしめるようにゆったりと歩きながらの作品鑑賞は、いつの間にかみんなを笑顔にする。

浜辺に杭を打ち込んでロープを張り、そこに洗濯物を干す要領でTシャツをつなげていく。Tシャツの胸のところには、全国から寄せられた絵画・イラスト・CG・写真などの応募作品がプリントされている。したがって、1枚1枚が世界に2つとないオリジナルTシャツだ。

応募者は、参加費4000円を払って原画等を郵便やメールで送る。事務局がそれをTシャツにプリントし、アート展期間中は砂浜に展示。終了後、原画とともにTシャツを応募者に返送する。応募者にとっては、自分の作品が海や空と一体になってアートの一部を構成することができ、なおかつ作品をプリントしたTシャツが自分のものになるので、参加費分の値打ちは十分すぎるほどあるに違いない。

また、応募全作品を対象に審査を行い、砂浜大賞1点(賞金10万円)、優秀賞2点(5万円)などの各賞が選ばれるので、実力があれば受賞ねらいの楽しみもある。

Tシャツ自体にもこだわり抜いている。原料の木綿はオーガニックコットン100%で、これを国内においてグリーン電力を使って縫製。サイズも6種類から選べる。Tシャツメーカー・久米繊維工業(株)の久米信行会長は、Tシャツアート展を「日本で、いや世界で一番美しく楽しいTシャツイベント」と表現し、公私にわたって応援している。

基本的な考え方について 若者たちで徹底的に議論

砂浜美術館の構想が生まれたのは、1989年に行われた第1回Tシャツアート展のときだ。東京の写真家・北出博

基さん(故人)が、「自分の撮影した写真をTシャツにプリントして砂浜に展示したら面白いのではないか」というアイデアを抱いていた。それを聞いた知人のグラフィックデザイナー・梅原真さん(高知県在住)は、それなら大方町(現黒潮町)の海岸がいいと考えていたところ、同町の若手職員2人(松本敏郎さん、畦地和也さん)が別件で梅原さんを訪ねてきた。

梅原さんの話を聞いた松本さんらは、ぜひTシャツアート展を実現させたいと町長に直談判するとともに、役場内外に声をかけて一緒に活動するメンバーを募った。こうしてつくられたのが、町職員や商工会、青年団などのメンバー約30人で構成する「砂美人連」だ。

砂美人連では何度も集まって喧々諤々の議論を重ねたが、それは具体的な運営方法についてではなく、基本的な考え方についてであった。その当時、地域では青年団などの活動がそれなりに活発だったが、イベントで盛り上がりながらもその場限りで終わってしまい、後に続いていかないというジレンマが彼らを悩ませていた。梅原さんもそういった事例をいくつも見てきて、松本さんたちに「考え方をきっちりすることが大切」と強調していた。

せつかくのアイデアを一過性のイベントで終わらせないためにどうするか。そんな話をする中で、メンバーの1人が撮影した、ありふれた砂浜の写真に目が留まった。「これも十分作品だよ」と誰かが言い出したことから、地元のありのままの自然や人間の営みに対して「これも作品」「あれも作品」と議論が発展していった。こうしたやりとりの成果を梅原さんがまとめたのが、「私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です」で始まる砂浜美術館のコンセプトだ。

行政の支援については、ちょうど同じ年にスタートした新たな総合振興計画の重点項目中に「松原の復活」が盛り込まれており、これに関連付けた事業として位置づけるなどの工夫をして、町長を説得。当時の坂本義春町長は、「何もせんかったら何も起こらんけん、失敗してもいいからやってみろ」とゴーサインを出した。

こうして1989年8月13日から3日間、第1回Tシャツアート展が開催された。毎年入野海岸で開催されている夏祭り「フェスティバル大方」に合わせた企画で、砂の彫刻の展示も同時に行った。主催は、砂美人連のメンバーを中心とするシーサイドギャラリー実行委員会。このときはまだ作品を公募せず、北出さんの写真作品をプリントした200枚のTシャツを展示した。事業資金としては、町からの補助(シーサイドギャラリー事業費)165万円の



ホエールウォッチング

ほか、Tシャツの販売も行って20万円を売り上げた。

当時としてはかなり斬新な企画だったことから、新聞等でも取り上げられ、初めての試みは無事成功を収めた。以後、この催しは毎年途切れずに続いており、砂浜美術館のコンセプトを象徴するイベントとして年々賑わいの度を増している。

観光協会や公園管理協会と 統合してNPO法人化

その後、「砂浜美術館」のコンセプトを具現化するための諸事業を官民一体となって推進するため、任意団体としての「砂浜美術館」が設置され、役場内に事務局が置かれた。活動計画や予算については、議会や関係団体等で構成する運営委員会において決定する仕組みであった。

NPO法人化したのは2003年9月。その理由について、特定非営利活動法人NPO砂浜美術館理事長の村上健太郎さんはこう話す。

「砂浜美術館の理念は少しずつ浸透しつつあったものの、やはり一部には、Tシャツアート展について『町の予算を使って洗濯物を干して何になるのか』といった批判もありました。また、『町の職員が仕事もしないで砂浜で遊んでる』などと捉える人もいました。そこで、きちんと独立した法人格を取得し、事務局体制も確立して町と対等な組織として、改めて行政との関係を構築しようということになりました。」

法人化にあたっては、観光という切り口で共通点のある4つの団体の統合が検討された。前述の砂浜美術館運営委員会のほか、大方町観光協会、大方町公園管理協会、大方遊漁船主会である。Tシャツアート展などが開かれ砂浜美術館の主要拠点となっている入野海岸は、高知県が管理する都市公園（高知県立土佐西南大規模公園）の一部であり、この公園の管理を県から受託していたのが大方町公園管理協会である。また大方遊漁船主会は、当時脚光を浴びつつあったホエールウォッチング事業を行っていた。

より効果的・効率的な観光振興を図るには、組織統合までいかなくともせめて窓口を一本化することが望まれる。話し合いの結果、遊漁船主会以外は組織を解散し、NPO砂浜美術館として公園管理や観光振興事業に取り組むことになった。また遊漁船主会も、組織は残すもののNPO砂浜美術館にホエールウォッチングの窓口を置くこととし、4団体が一致団結するという目的は達成された。

2006年3月には、大方町と佐賀町が合併して黒潮町が



モンゴルでもTシャツがはためいた

誕生した。その際も、新町としての振興計画の中に砂浜美術館の理念と事業を継承していくことが明記された。「現在も町とはうまくパートナーシップを築けています」と村上さん。

現在、17名の専従職員を擁し、前述の業務のほか、地元ケーブルテレビ局の番組制作、ウェブ・ショップの運営、小学校での出前授業など幅広い事業を実施している。

ビーサン飛ばし大会など 多彩な併催イベント

ここからは、NPO砂浜美術館の事業を詳しく紹介しよう。

〈Tシャツアート展〉

概要は前述のとおりだが、期間中は多種多彩なイベントが併催される。2017年の場合、次のようなものだ。

- ・笑顔の傘をさしてみよう！（MERRY PROJECT）……MERRY PROJECTは、Tシャツアート展の審査員を務めるアートディレクター・水谷孝次さんが主宰するアートプロジェクトで、「笑顔は世界共通のコミュニケーション」がテーマ。その一環として、世界の子どもの笑顔がプリントされた傘を砂浜で開き、地元の小学生たちがさして歩いた。
- ・砂浜ポスト……期間中、砂浜に郵便ポストを設置し、郵便局からも出張して切手やはがきを販売。潮風の中で家族や友人にお便りを書いてもらう。
- ・シーサイドはだしまラソン全国大会……砂浜をはだして駆け抜けるレースで、Tシャツアート展より歴史が古く32回目を迎えた。
- ・月夜の映画祭……砂浜に大きなスクリーンを立て、キャンドルの灯りに囲まれた夜の砂浜に座ったり寝そべったりしながら観覧席で映画を鑑賞。
- ・ビーサン飛ばし大会……ビーチサンダルを蹴り飛ばして飛距離を競う。
- ・砂浜のひらひらステージ……砂浜を舞台に、さまざまなジャンルの歌、楽器演奏、ダンスなどを楽しむ。
- ・ホエールウォッチング……館長のニタリクジラに会えるかも。海上からTシャツを見るのも楽しみ。

一大イベントとなったこの催しを陰で支えるのが、Tボラと呼ぶボランティアスタッフだ。毎年8～10人程度を募集している。開会の前々日に集合してミーティングを行い、前日は展示作業。期間中は会場での受付や物品販売。終了翌日はTシャツの取り込み、たたみ作業をして翌々日解散。全9日間にわたるスケジュールで、滞在中の食事や



潮風のキルト展

ユニフォームは提供されるが、もちろん報酬はなく、交通費や宿泊費（廃校になった校舎を利用した施設で、特別割引あり）も自己負担。それでも、スタッフとして関わるからこその濃密な出会いや体験があり、1人ひとりにとってかけがえのない思い出になっているようだ。

もう1点、特筆されるのは、Tシャツアートが海を越えて世界へ広がっていることだ。2009年、モンゴルで活動していた青年海外協力隊を通じて現地へ作品が運ばれ、大草原にTシャツがはためいた。2015年には、JICA四国とのコラボ企画「世界とHIRAHIRA～JICA みんなの笑顔美術館～」により、協力隊の任地10か国をリレーする巡回展が開催された。2017年は、やはり青年海外協力隊の縁で中米・ベリーズへ旅する。

11月には松原を背景に パッチワークキルトを展示

〈潮風のキルト展〉

文字通りパッチワークキルトのコンテストで、応募作品は浜の背後に連なる入野松原に展示される。松の緑を背景として、色とりどりのキルト作品が秋風に揺れる様子は圧巻だ。風の向きや強さ、光の当たり方などによって、同じ作品でも刻々とその表情を変える。自然と人間が力を合わせて作品をつくり上げていくような感覚は、野外ならではのと言える。

黒潮町の特産物であるらっきょうの花が咲く11月に開催される。こちらも2016年（11月11～13日の3日間）が第22回と歴史を重ねており、初夏のTシャツアート展とともに、すっかり砂浜美術館の名物イベントとなっている。

募集する作品のテーマは「布を楽しむ」。応募規定は「小さな布の組み合わせを楽しんだり、モダンなパターンに挑戦したり、大胆に布で描いたり…おもいっきり、布を楽しんでみてください」と記す。

〈漂流物展〉

これまで、海辺に流れ着いたものはごみとしてしか見られてこなかったが、それも作品の1つとして捉えようという、ある意味で最も砂浜美術館のコンセプトを具現化したイベントだ。美しい貝殻、波に揉まれてアートそのものに変身した流木など、ロマンを感じさせる漂流物もある。かと思えば、農薬容器のように環境問題を考えさせるものもある。

直近では、2017年2月10日から3月5日まで、道の駅「ビオスおおがた」の情報館で開催されたほか、2016年9月には徳島でも開かれた。



砂浜トレーニング

〈体験プログラム〉

ホエールウォッチング、ビーチコーミング、天日塩作りなどの体験プログラムが用意されている。黒潮町（旧大方町）でのホエールウォッチングの歴史は小笠原に次いで古く、1989年から実施されている。入野漁港から出港して黒潮町沖へ出る、最大4時間のプログラムだ。

ビーチコーミングは、海岸に流れ着いたものを拾い集め、クラフトを作ったり収集して楽しむもの。砂浜美術館のプログラムでは、まず同館が所蔵しているさまざまな漂着物を見て触ってもらいながら、それぞれの漂着物からどんなメッセージが読み取れるかを説明する。その後海岸へ出て、実際に漂着物を拾い、室内に戻って思い思いのクラフトを作る。そうすることで、漂着物がごみではなく世界でたった1つの宝物になる。

毎日見ている風景の価値を 子どもたちに感じてほしい

〈小学校での出前授業〉

町内には8つの小学校があり、合わせて年間30回以上、砂浜美術館のスタッフが出かけて行って授業をしている。1つは4年生を対象としたTシャツアート展に関する授業で、まず砂浜美術館の理念や、その中でアート展がどう位置づけられるのかを説明。そのうえで各自が作品をつくり、アート展に参加する。もちろん会期中は、会場に足を運んで自分の作品と対面する。

また、前述のとおりTシャツアート展が海外へも広がっていることを生かし、国際理解教育も実施。今年であれば、ベリーズで展示する作品を子どもたちがつくと同時に、現地の社会や文化について学ぶ。このほか、単発で砂の彫刻づくりや漂流物についての話など。

村上さんは授業のねらいを、こう話す。「子どもたちの多くは、高校を卒業したら町を出ていきます。それは仕方ないにしても、黒潮町が嫌で出ていくようにはなってほしくない。毎日見ている風景の価値を心のどこかにとどめてもらい、外へ出て黒潮町を宣伝してほしいし、将来何かきっかけがあれば戻ってきたいと思ってもらえるようにしたいんです。」

〈スポーツ合宿の誘致〉

土佐西南大規模公園内には、多目的芝生広場（サッカー場・陸上競技場）、体育館、球技場、テニスコート、トレーニング室などの体育施設がある。これらの施設に隣接して広がる砂浜も、格好のトレーニングの場として利用でき、「これだけ砂浜の近くでさまざまな運動施設が



黒潮町空撮



砂浜美術館理事長 村上健太郎さん

整っているところはあまりない」(村上さん)。

もちろん、温暖な気候もスポーツ向きだ。こうした環境を生かし、大学や小中高校などのスポーツ合宿を積極的に誘致している。イベントはどうしても一時期だけの集客効果にとどまるのに対し、スポーツ合宿は季節にあまり関係なくある程度まとまった数を呼び込むことが期待できる。

2011年に誘致活動を始めたときは年間300人ほどの利用実績だったが、2016年は約8500人まで増えた。大きな大会があったりして宿泊施設が町内で間に合わない場合は、隣の四万十市の宿を紹介している。「私たちも手数料収入を得られるし、地域のお弁当屋さんなども潤うので、今後も力を入れていきたい」(村上さん)。

美術とはものの見方を変えさせ 新たな価値観を吹き込むもの

こうしたさまざまな事業を展開するようになったNPO砂浜美術館だが、前述した基本コンセプトは常に忘れないようにしている。「美術館」という言葉は、単に「砂浜という美しい“作品”がそこにある」ことを意味しているのではない。優れた芸術作品は、それを見る人にももの見方を変えさせ、新たな価値観を吹き込む力を持っている。砂浜美術館が目指しているのもその点だ。

たとえばTシャツアート展は、砂浜に杭を打ってロープを渡し、たくさんのTシャツをひらひらさせることで、見慣れた砂浜に全く新しい風景を現出させた。そして1つひとつのTシャツにプリントされた作品も、海と空の青を背景に、光と風を受けることで、机上に置いているだけではわからなかった別の表情を獲得する。

NPO砂浜美術館では現在、そんな考え方を共有してくれる地域にTシャツアート展を広げていきたいと、「HIRA HIRA フレンドシップ」と銘打った取り組みを始めている。その舞台は何も砂浜に限らない。山でも川でも、ロープとTシャツさえあればそこが美術館になり、当たり前のように思っていた場所に新たな価値が生まれる。

フレンドシップになりたいという希望者には、まず団体でTシャツアート展に応募してもらい、自分たちの作品を現地まで見に来てもらう。そして砂浜美術館講座を通じてその理念やこれまでの歩みを知ってもらう。その後、Tシャツアート展で展示された作品をフレンドシップの地元へ送って、それぞれの場所でTシャツがひらひらする風景をつくってもらおうというわけだ。Tシャツもキルトも、「自分たちのまちを楽しむためのツールであり、気持ちよくそこで暮らしていくためのツール」と位置づける。

漂流物展のねらいも、何にどんな価値を見出すか、各自の感性で自由に考えてもらうことだ。その背後には、ごみにしかならないような漂着物をなくして美しい砂浜を保全したいという思いもある。ただ、真正面から「砂浜を守りましょう」と訴えかけるのではなく、漂流物展やTシャツアート展などのイベントを通じて、1人ひとりの心の中で自由に砂浜の価値を見出してほしい。それこそが、砂浜をいつまでも守っていく本当の力になるということだろう。

日本一厳しい被害想定を踏まえ 防災学習プログラムも実施

黒潮町は、2012年3月に発表された南海トラフ巨大地震の新想定で、震度7、最大津波高34メートルと日本一厳しい数値になった。これまでも、100～150年に一度は大規模地震が発生してきた歴史がある。溢れるほどたくさんのお恵みをもたらしてくれる海が、ほんのときたま人間社会に鋭い牙を向ける。そのリスクは、確率にすれば0.0…%というレベルだが、そのわずかなリスクにきちんと備え、自然とともに生きるお作法=防災の知恵を身につける必要がある。

そこで、NPO砂浜美術館でも防災学習プログラムを実施している。講義、ワークショップ、フィールドワークで構成し、ワークショップではクロスロードという手法を用いて、災害時の状況を想定し自分の行動をシミュレーションする。またフィールドワークでは、緊急避難タワーや江戸時代後期に建てられた津波の碑を訪れる。

今後の展開について、村上さんはこうした取り組みも含め、「地域の教育現場でのプログラムをいっそう充実させていきたい」と話す。砂浜美術館のコンセプトから言えば、この地域に暮らす人々の営みもすべて作品だ。自然のお恵みを生かして和紙や天日塩を作る人、カツオ漁に従事する人……。「そういった文化を伝えるための旅行商品も開発していきたい。それによって、地元住民にも旅行者にもこの町の良さをわかってもらえんと思います」。

課題としては、人材育成、職員の給与アップ、行政との定期的な情報共有とより深いレベルでの合意形成などを挙げる。

以上に見てきたとおり、砂浜美術館の取り組みはきちんとした哲学に裏打ちされたコンセプトと、その上に構築された柔軟な発想に基づく事業が特徴だ。「自分たちが楽しむことをすごく大事にしています。楽しむ力が、結果的に地域の力になると思うんです」という村上さんの言葉が印象に残った。